

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23531162

研究課題名(和文) 編集を概念装置とした読むことの学習指導論の再構築とその授業開発に関する研究

研究課題名(英文) Study to rebuild a theory, and to develop an instruction method on learning instruction of reading based on a way of thinking of the editing

研究代表者

寺井 正憲 (TERAI, MASANORI)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：50272290

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：現在、読むことの学習指導では、多様な表現活動を行う学習指導が広く行われている。それらの指導方法を編集という概念装置を用いて一元的にとらえることによって、編集としての読むことやその指導方法のプロセスを単純化して組織することができるようになる。また、言語活動の選択や加工によって身に付けさせる読む能力を自在に変化させ具体化することができる。さらに、学習に必要な学習材の提供や教師の支援の方法についても、編集のプロセスに即して適切に行うことができる。これらの考え方を活かして指導方法を工夫し、編集の考え方による書き換え学習や創作学習の授業実践を提案することができた。

研究成果の概要(英文)：Instruction method with various expressive activities is performed widely in the education of reading at present. When you remodel their teaching methods with the idea of editing, it is possible to simplify the process of reading, the process of teaching methods. In addition, it can be to choose language activity and process language activity, change the ability to read freely and be embodied. Furthermore, you can offer teaching materials necessary to learning and support a learner appropriately in conformity with a process of edit. Then, by devising the teaching methods by utilizing the concept of editing, we were able to practice learning to rewrite the text effectively, it could also be used to practice the learning that ingeniously creative text.

研究分野：国語教育学

 キーワード：編集 読み書き関連 書き換え 創作学習 読むことの学習指導 言語活動の教材研究 意味の受容生
成

1. 研究開始当初の背景

(1) 読むことの学習指導において何らかの表現活動を行い、それを通してテキストを読むことや新たなテキストを創造する授業実践が広く行われている。昭和52年版学習指導要領の読み書き関連学習から平成20年版学習指導要領のPISA型読解力を発展させた言語活動の充実による学習指導に到るまでの施策によって、この傾向は次第に強まってきた。しかし、多様な授業実践を整理する理論が整備されておらず、また授業実践の学習指導のプロセスが学習者の意識の上でも、言語活動の流れの上でも、身に付けさせようとする能力の上でも一貫しておらず、夾雑な状態にあるという問題があった。

(2) 研究者代表・寺井は、主に説明的な文章に関わる読むことの学習指導の研究において、読み手の想の展開のプロセスに着目して、読むプロセスをテキストの意味の受容生成のプロセスとしてとらえて学習指導理論を提案してきた。

「説明的文章教材の「テキスト生産的な学習指導」に関する一考察 想の概念を導入して」(『月刊国語教育研究』第347号、2001)、「説明的文章教材の学習指導における新しい地平(連載)」(『実践国語研究』第274~287号、2006~2008)などで、これまでの説明的文章教材に関する読解指導の課題を整理し、PISA型読解力などを踏まえた上で、これからの学習指導の方向として、読むプロセスを書くプロセスと重ねて、学習者の読むプロセスにおける想の展開に着目した研究を進めてきた。

「説明的文章の学習指導におけるリテラシーの地平 テキストを生産する読者の育成を中心に」(『新しい時代のリテラシー教育』所収、2008、東洋館出版社)で、既存のテキストを解体し新たなテキストとして組織する行為を編集ととらえ、編集を概念装置として用いることで、多様な読む活動と多様な表現活動を統合的に結び付けた読むことの学習指導理論を構築する必要性を説いた。

(3) そこで、編集の考え方を使うことによって、多様な表現活動を取り込んだ読むことの学習指導を一元的にとらえ、自在な授業づくりに役立てられると考え、この課題を追求しようとした。

2. 研究の目的

本研究は、以上のようなことを研究の背景として、読む行為を編集行為としてとらえ、編集という観点から読むことの学習指導における学習指導理論の再構築を行うとともに、実践レベルで具体的な指導方法を開発することを目的とする。本研究では、編集を狭く本づくりに関わる実務作業としてではなく、より広く既存のテキストから情報を取り出しそれらを結びつけ新たな文脈としてテ

キストを創造する一連の情報活用プロセスを編集としてとらえるものとする。この観点から、読み書きの関連学習、書き換え学習、出版学習、PISA型の読解学習などの表現活動を取り入れた理論や実践における特質や課題を明らかにし、表現活動を伴う読むことの学習指導の再構築を行う。また、実践集団を組織したり実践研究の拠点校を設定したりして授業研究に取り組み、再構築した学習指導の考え方に基づき、授業実践を重ね、実効性の高い指導方法を提案する。

3. 研究の方法

(1) 外山滋比古、松岡正剛らの考え方を援用し、読むことの学習指導に援用するための編集という概念装置の検討を行う。加えて、編集という観点から読むことの学習指導論、書くことの学習指導論において過去に実践し議論されてきた読み書きの関連学習、書き換え学習、出版学習、PISA型の読解学習などの先行する学習指導の理論や実践を整理する。編集という概念装置による受容産出的な読みのモデルに立って、読むことに関わる技能を整理し体系的に編成し直す視点を提供できる。

(2) (1)の成果に基づき、編集の考え方に基づく読むことの学習指導の在り方を構築する。文字テキストによる各種のメディアの特性を踏まえた編集活動に着目し、メディアの特性と情報活用の在り方を関連させた編集活動、言語の機能に応じた情報活用や思考・言語の操作などに関わる編集活動、表現の発想段階における読み書きを連動させる編集活動などの観点から、学習指導の在り方を考える。

そして、この学習指導の考えに基づいて、実践研究の拠点校や授業開発の研究会を設置して、授業開発並びに検証授業を行う。そして、編集の考え方に基づく読むことの学習指導の在り方や方法について提案する。

4. 研究成果

(1) 外山滋比古は、狭義の編集に留まらない、文化的創造一般の原理を編集(エディターシップ)という概念に見出し、「結ぶ」と「切る」という操作が互いに交錯しながら文化が創造されるとしている。この考え方を援用すれば、読むという行為は、テキストの破壊から要素の分解、そして要素の融和から新たなテキストの組織というプロセスを実践することであり、さらには生成されたテキストをまた破壊し新たに組織するという尽きることのないプロセスを実践し続けることとして理解される。そのプロセスを効果的に営む能力を読む力として措定し、また、そのプロセスを倦まず弛まず営み続けるのが読書生活を営む態度として理解される。このテキストの破壊から組織というプロセスは、情報を編集する行為、あるいはそのアナロジー

として理解することができることが分かった。

また、松岡正剛も同様の考え方から「編集には、そもそも人間の認知活動から表現活動までが、記憶のしくみから知識の組み立てまでが、また、メディアによる編集のあれこれからコンピュータ・ネットワーク技術による編集までが、ほぼすっぽりと含まれる。」(『知の編集術 - 発想・思考を生み出す技法』講談社現代新書、2000、16頁)と述べ、編集の技法を体系化しており、情報の活用ばかりでなく発想や思考野学習としても有効なことが分かった。

そして、編集という概念装置を持ち込むことで、現在の多様なメディアを前提とした読む活動と表現活動を統合的に結びつけた読むことの学習指導論を再構築することが確認された。

(2) 表現活動や読書活動を取り入れた読むことの学習指導に関する先行する授業実践を整理し批判的に検討すると、次のような問題が認められた。

第1に、第2次で行われる読解学習と第3次で行われる表現活動ないし読書活動が、運用する知識や技能などの能力の面から断絶していることが分かった。例えば、文学では第2次で心情理解を中心にした読解を行い、第3次で読書活動を伴う物語を紹介する表現活動を行う授業の場合、第3次の紹介活動にあらずし、人物、人物関係、優れた文章表現、メッセージなどに関する情報が必要だが、これらの知識や技能に関する学習指導が第2次で行われていないという問題が多い。また、説明的な文章の学習指導でも、第2次の要約学習と第3次の調べ学習の読書活動やガイドブックづくりの表現活動との間に知識や技能の学習指導に関する関連性がないという、文学的な文章の学習指導と同様の問題が認められる。

第2に、第1の問題からも分かるように、これまでの表現活動を取り入れた学習指導では、学習者の読み意識が一貫してつながって流れないものとなっていることが分かった。本来であれば、第1次で、学習のゴールである表現活動が完了した作品などを知ることによって、学習の目的や見通しを持つことになるはずだが、第2次と第3次が学習として乖離しては、学習者は見通しを持って戦略的能動的に学習を進めることができないという問題が認められる。これを言い換えれば、第2次の学習では知識や技能の指導は行われるが学習は受動的であり、第3次で学習は能動的になるが、知識や技能の活用という能力の指導がなおざりになるという問題としても理解される。

(3) (2)の二つの問題は、読解する活動、表現する活動、読書する活動が、学習指導として単に組み合わせられたにすぎず、一貫し

た学習プロセスとして編成、組織できていないことに起因すると考えられる。それは、結局読む行為が、テキストを破壊し要素に分解して、そして要素を融和し新たなテキストを組織するという情報を編集するプロセスとして理解されていないということである。

この読むプロセスを、情報を編集するプロセスとして理解し、学習指導として授業を実現するためには、次の6点が重要であることが分かった。

第1に、表現活動としての言語活動の機能や様式を考え、その機能や様式に応じた編集としての読み表すまでの言語活動が編集されプロセスが具体化する。機能や様式に応じて、プロセスは質的に変化し、そこで身に付く能力や体験する言語経験も変化する。そのことが、学習の質や難易度に影響する。

第2に、扱う話題やテーマ、そして話題やテーマに関わる情報の質や量によっても、第1と同様に読み表すまでの編集のプロセスは質的にも量的にも変化する。このことは、言語活動における情報処理の質や量に影響し、そのことが学習の質や難易度を左右する。

第3に、第1、2を身に付けさせる能力との関係から見ると、読んで表すまでの編集のプロセスは、実は身に付けさせようとする知識や技能を学習指導として編集することになる。

第4に、授業として学習指導を実際化するためには、教師が実現したい読者像、目標などのねらいに応じて、第1～3の観点に関わる調整や加工を行い、学習としての言語活動を具体化する。それを確かなものにするために、言語活動を自ら実際に行う、言語活動の教材研究が必要になる。教師自身が言語活動を体験するプロセスにおいて、第1～3の観点に関わる調整、加工を効果的に行うことができる。

第5に、言語活動の教材研究によって作成される作品は、学習の見本として活用される。見本は、学習のプロセスに即して学習者が必要とする学習の見通し、話題やテーマ、情報の質や量、情報処理の方法などに関わる学習材として機能する。

第6に、学習の難易度を考慮するためには、学習者の実態把握が重要である。特に、編集活動を伴う言語活動は、思考力・判断力・表現力などの活用に関する能力に関わるので、全国学力・学習状況調査の結果を考慮することが有効である。

(4) このような視点による学習指導は、学習者のとらえ方も新たにする。学習者は、産出する表現物やその表現物の社会的文化的な文脈における活用を見通しながら、読み表すプロセス、つまり言い換えれば情報の編集プロセスを常に企画、構想し運営、調整する、言わばエディター(編集者)としての役割を担うことになる。そのような役割を担わせることによって、学習者を戦略的な言語運用者

足らしめ、自らの目的を自律的に実現するためのメタ認知能力を高め、思考や認識の方法を含んだ種々の編集方略を操作的に活用する読者、言語運用者、言語生活者として育成することになることが分かった。

なお、学習者が自ら行う言語活動を戦略的に営むためには、学習のゴールについて具体的なイメージを持つ必要がある。そのために、(3)の第5で示した教師の言語活動の教材研究によって作成された作品を学習の見本を学習材として機能させることが有効であることが分かった。

(5)実践研究について、船橋市小学校国語部会と連携する共同研究を行い、編集としての書き換えを取り上げ、その指導方法について、授業実践を積み重ねた。書き換えという編集の操作は、全国学力・学習状況調査でも多出されるものであり、また授業づくりの方法としても平易であり、指導方法として汎用性が高い。文学的な分野 12 実践、説明的な分野を 6 実践の、合計 18 実践を行い、効果的な読むこと、書くことの学習指導を実現することができた。

(6)実践研究について、研究拠点校として習志野市立大久保小学校で文学の創作学習に関する共同研究を行った。文学作品の元テキストを分析し、その内容や表現の特質をとらえ、それらをメタ認知して学び、模倣や改変による編集活動によって新テキストを創作する学習指導を実践した。1~6年まで、詩や俳句、短歌の創作 4 実践、民話の創作 1 実践、シリーズの創作 4 実践、物語の創作 7 実践、伝記の創作 1 実践、随筆の創作 1 実践、影絵劇の創作 1 実践、合計 19 実践を開発した。編集という考え方に基づいて、これまでとは異なる読み書き関連の工夫ができ、従来の創作学習で課題であった文学的な表現の効果的な学習指導を実現することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

寺井正憲、学力向上と言語活動の充実 全国学力・学習状況調査の結果公表を想定した備え、小学校時報、査読無、第 758 号、2014、4-8

寺井正憲、国語科における授業づくりの課題 授業をどう変えていくか、教育研究、査読無、第 1337 号、2013、18-21

寺井正憲、言語生活を基盤にした国語科の授業づくり 学力向上のための戦略、子どもと創る「国語の授業」、査読無、第 40 号、2013、44-47

寺井正憲、言語活動の視点から見た課題解決学習、教育研究、査読無、第 1312 号、

2011、18-21

寺井正憲、評価基準の作成のための参考資料の生かし方 小学校国語、指導と評価、査読無、第 681 号、2011、4-7

寺井正憲、言語活動の充実によって学力向上を図る 実生活に役立つ言語力の育成、兵庫教育、査読無、第 722 号、2011、10-15

〔学会発表〕(計 1 件)

寺井正憲、言語活動の授業づくりと説明文教材の教材化研究、全国大学国語教育学会第 122 回筑波大会、2012 年 5 月 27 日、筑波大学(茨城県つくば市)

〔図書〕(計 5 件)

寺井正憲 他、東洋館出版社、アクティブ・ラーニングによる文学の創作学習(印刷中)、2016

寺井正憲 他、明治図書出版、書き換え学習で創るアクティブ・ラーニングの授業(印刷中)、2016

寺井正憲 他、東洋館出版社、発問 考える授業、言語活動の授業における効果的な発問、2015、118(8-18)

寺井正憲 他、東京書籍、思考力を育てるワークシート集・小学校編、2014、63

寺井正憲 他、学芸図書、国語科教育学研究の成果と展望、2013、574(153-160)

6. 研究組織

(1)研究代表者

寺井 正憲(TERAI MASANORI)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：50272290